

激動の経営

山あり谷あり

大阪国際空港（伊丹空港）の北西、JR北伊丹駅から徒歩数分の距離にその工場はある。段ボールメーカー、パック・ミスタニ（大阪市西区）の伊丹事業所（兵庫伊丹市）だ。飛行機の発着するごう音が時折聞こえる中、自動車部品などを運ぶ大型の段ボールが次々と組み立てられていく。かつて火災で全焼したこの工場は、日本最大級の段ボール用印刷機が稼働する拠点として再建された。伊丹の地で、歴代経営者の思いがつながる。

パック・ミスタニ①

パック・ミスタニはネジやクギなどを運ぶ木箱の製造を祖業として、1909年に大阪市内で創業した。その後、段ボール製造や伊

丹の工場開設で少しずつ拡大していった。「経営者だった祖父や父が残したものはとても大きい」と社長の水谷博和は振り返る。父の博和から会社を継

会社を継ぐのは自分



伊丹事業所では国内最大級の段ボール用印刷機が稼働する

いだの2010年、26歳の時。道のりは平坦ではなかった。修行途中の転職

水谷は大学卒業後、ヤマト運輸に就職し

父の病・祖父の激励に決断

た。「段ボールがどう使われるのか現場を見てみたかった」からだ。仕分けや配送に汗を流し、顧客の相談窓口も経験した。単なる運送ではなく、サービスの付加価値を追求する「ゼロからイチにする商売の仕方」を学んだことが、のちにパック・ミスタニの経営方針に影響を与える。

23歳で転職し、パック・ミスタニに入社。得意先の製品を倉庫から出入庫する作業などを経験した。後継ぎとしての修行を着実にこなしていたが、転職は早く訪れた。当時、社長を務めて

いた父に胃がんが見つかった。容体が危なくなつたある冬、中興の祖父が祖父に呼ばれた。「自分にはできない。お前がやれ」。水谷は小学生の頃「会社を継ぐことは自分にはできない」と考え、祖父や父に伝えたことがあった。その時、2人はとても喜んでくれた。翻って今、祖父の言葉が現実の問題として迫ってくる。覚悟を決めた。

柔軟さ武器に

社長就任後、東日本大震災や新型コロナウイルス感染拡大などで事業環境は激変した。

（敬称略）

▽所在地 大阪市西区立売堀4の8の10代
表者 水谷博和氏
▽創業 1909年（明治42年）
▽資本金 4800万円
▽従業員 130人
▽売上高 非公表